

終章

まとめと展望

1 戦後——消えた国外

戦後、柳田は『先祖の話』や『新国学談』三部作に精力的に取り組んでいったが、『新国学談』に「窓の灯」という欄が設けられており、柳田はそこで自分の所感を書きとめている。「昭和二〇年の歳末」とある「四 民間伝承の会消息」という文章もその一部である。そこで柳田は古稀記念会についてこう書いている。

一番心苦しく感じたことは、その雑誌の中に、私の七十歳を記念する講演会や特輯号、大きな記念論文集の計画などが、花々しく公表せられたことである。結構なまた学問のためにも利用し得られる企てではあったが、自分はわざと前以て知らされず、其計画に口を出すことができなかった。聞いて喜んでそいつは痛快といつては見たものの、実はその頃にももう此計画は影が薄かった。（中略）善後策としてはこの三つの事業のうち、

国外にいる民俗学者が次々帰国し、日本民俗学も次第に活気を取り戻している。太田陸郎はすでに戦時中に亡くなり、大間知篤三は日本に引揚する際すべての資料、手記と書籍を失ったこともあり、帰国後、中国に関する発表はほとんどせず⁽³⁾、もっぱら満洲の民族調査で体得した調査法を駆使して、隠居を中心とした家族制度の研究に力を注いでいった。

三人の中で、中国に対する関心を保ったのは直江広治だけである。彼は帰国してから中国に関する文章を書き続けており、とりわけ戦時下北京での経験を生かした中国民俗学史の論文は関係学界で高く評価された。その後、柳田の理論に徹する姿勢で大著『屋敷神の研究』をなしたが、同時に「比較民俗学」の提唱者として知られている。

その代表的なものは「八月十五夜考」（一九五〇年六月二七日付）⁽⁴⁾である。そこで、南島、朝鮮の例をあげて、「内地の年中行事更にその背後の信仰生活を考えるには、どうしても水稻がこの国に持ち込まれた以前の、先々の土地での稲作行事を綿密に跡付けて比較してみなければならぬ。さしあたり南島、それから台湾、更に南方のマライシヤであるが、一方朝鮮から華中、華南更に印度支那へと、次々にたどって行くことも必要である。この仕事はもうエスノロジーの領分になる。ここにもフオクロアとエスノロジーとの提携が必要とする大切な領域がある」と述べている。

直江広治の「比較民俗学」の提唱は、方法というより、歴史的な人的移動、文化交流を背景とした対象の問題である。南島からマレーシアへ辿っていくルートでも、朝鮮、華中、華南、インドシナへのルートでも、いわゆる日本人の起源を意識している。しかし、民俗によって構成され得る歴史は上限があり、悠遠な起源まで辿りつくことができないし、文化要素の類似を持って直接伝播や影響関係まで論じることでもない。実際それ以降、直江流の「比較民俗学」はあまり展開できなかった。